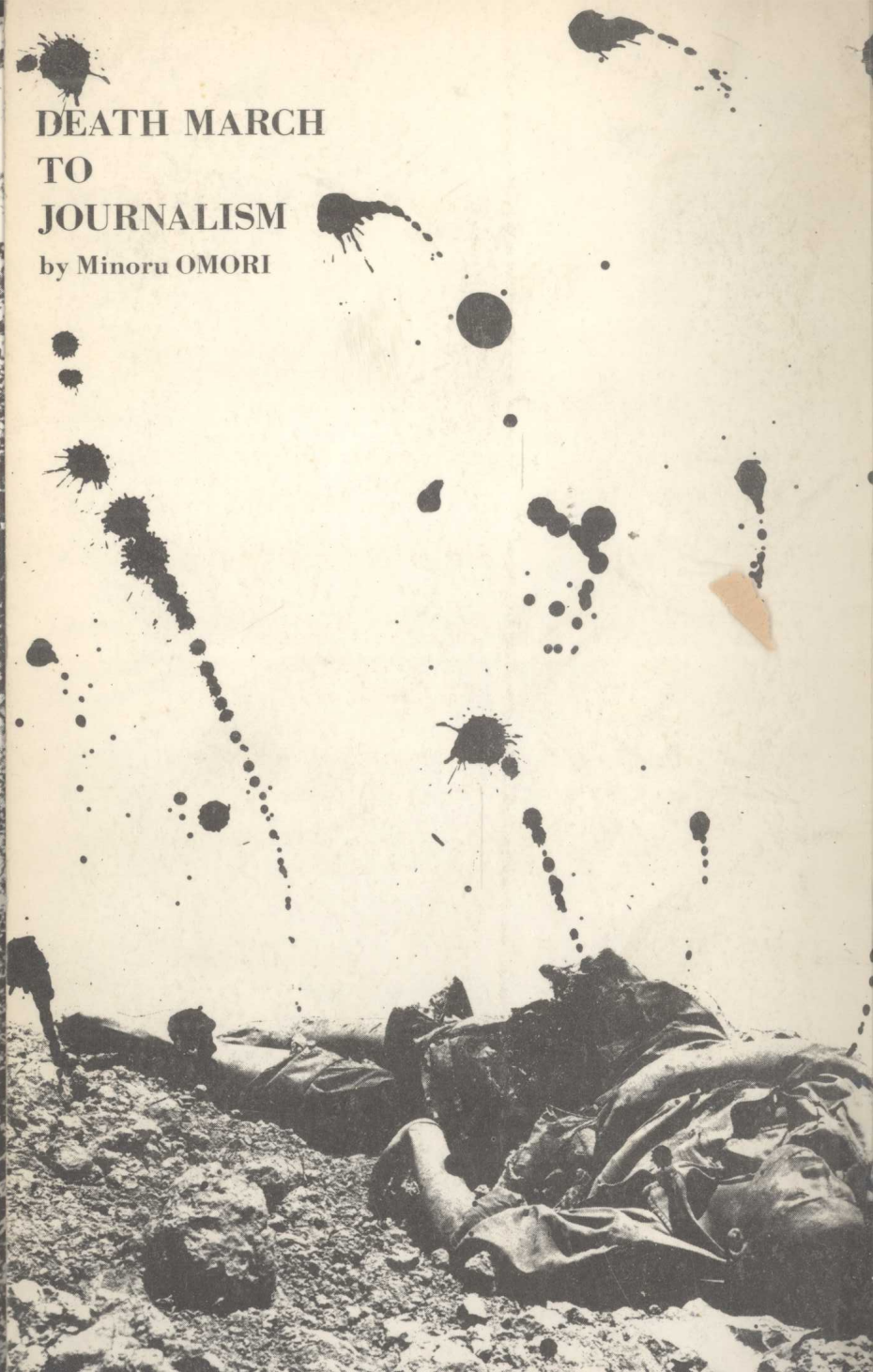
DEATH MARCH TO JOURNALISM

by Minoru OMORI



大森　実（おおもり・みのる）

1922年（大正11年）神戸市に生まれる。神戸高商卒。45年毎日新聞社に入社後，同社ニューヨーク支局長，ワシントン支局長を経て，62年外信部長となる。66年毎日新聞社を退社。67年より3年間，週刊新聞『東京オブザーバー』を主宰。70年2月休刊し，現在大森国際問題研究所にて執筆に専念。

カリフォルニア大学外人記者賞，ボーン賞，日本新聞協会賞を受賞。著者に『第三の引金』『大統領の紋章』『天安門炎上す』『石に書く』（以上潮出版社）『国際事件記者』（中央公論社）『泥と炎のインドシナ』（毎日新聞社）『民族戦争』（新人物往来社）『金日成と南朝鮮』（サイマル出版会）など多数。

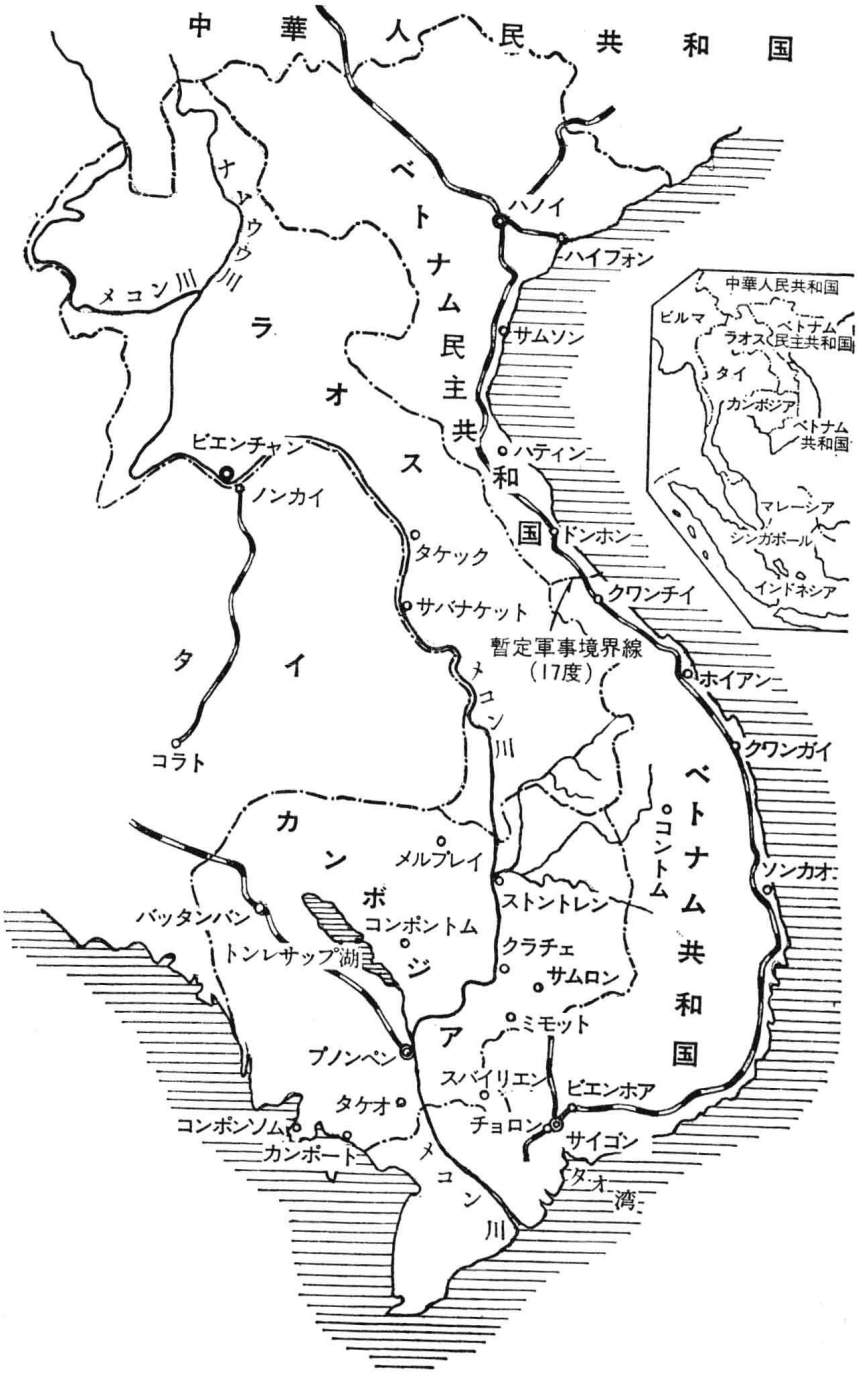
虫に書く

初版印刷　1972年11月10日　　**定価 650円**
初版発行　1972年11月25日

著者　大森　実
発行者　碓井昭雄
発行所　株式会社 潮出版社
〒160　東京都新宿区南元町14の1
電話（357）7111　振替 東京 61090

印刷・製本／大日本印刷

© 1972. Minoru Ohmori Printed in Japan


中華人民共和国
ベトナム民主共和国
ハノイ
ハイフォン
サムソン
ハティン
ドンホン
クワンチイ
ホイアン
クワンガイ
ソンカオ
ベトナム共和国
コントム
ストントレン
クラチェ
サムロン
ミモット
ビエンホア
サイゴン
タオ湾
チョロン
スバイリエン
プノンペン
タケオ
コンポンソム
カンポート
カンボジア
メルプレイ
コンポントム
トンレサップ湖
バッタンバン
ラオス
ナムウ川
メコン川
ビエンチャン
ノンカイ
タケック
サバナケット
暫定軍事境界線
(17度)
タイ
コラト
中華人民共和国
ビルマ
ベトナム
ラオス民主共和国
タイ
カンボジア
ベトナム共和国
マレーシア
シンガポール
インドネシア

ボクは持たない
たぶんひとつの希望か
きっと実現するたぶんひとつの夢か
それは木造の家屋敷の中の
一本の釘になること
家々の立ちならぶ都市の中で
いくつもの都市がある惑星の上で
無限に広がる
宇宙のただ中にあって
ボク自身になること

虫に書く——ある若きジャーナリストの死

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

第一章

1

東京大地震が、起こるのではないかとさえ思えるほど、不快指数は高かった。

暑い日であった。アメリカから持ち帰ったまま、まだ一度もオーバー・ホールをしないで、使い放しにしてきたせいか、GEのエア・コンディショナーは、やけに騒音を立てすぎる。秘書室の電話も、さっきから鳴りっ放しだ。女の子の秘書は三人いるが、誰か一人は、電話にかかりきらねばならぬ。電話を一本から二本に増やしたことが悔いられた。この暑さに加えて、冷房機の騒音と、電話の鳴りっ放しはたまったものではない。

伊藤恢子が、秘書室から顔を出し、

「アメリカのCBS放送の東京支社から、お電話です。直接、所長にお話がしたいそうです」

と告げた。

「もしもし……」

私は受話器をとって、日本語で呼びかけたが、相手が外人だったので、慌てて、英語に切りかえた。伊藤恢子は、電話の主が、アメリカ人だとは言わなかった。

「ハロー……」

電話の主の会話を、日本語に直すと、こういうことになる。

「あなたの研究所の、ナカジマ・テルオは、柔道か空手の選手だったでしょうか？」

「ノー。中島照男が、スポーツをやった話は聞いたことがありません。彼は学生時代には、たしか新劇をやっていたはずです。柔道、空手なんかとは、およそ縁の遠い存在でした」

私は、「でした」と、過去形で、中島照男と、柔道、空手との関係を、全否定してしまったとき、ふと不吉な予感を覚えた。これは凶報かもしれぬぞ、と思ったのだ。

CBS放送の東京支社から、中島照男のカンボジアにおける失踪について、いろいろ聞かれ、ニューヨークのCBS放送が、幹事社となり、カンボジア戦線で、失踪したジャーナリスト捜索のため、国際委員会がジュネーブで開かれるから、出席しないかと誘われてから、もう半年近くになる。

私は、よんどころない取材で、香港に出張する予定だったので、ジュネーブの失踪ジャーナリスト国際委員会への出席ができなかったことを悔いていた。ジュネーブ国際会議への出席については、日本人ジャーナリストを代表して、フジテレビの大和報道部長に、私は日本人記者の失踪者をもつ会社を代表して、フジテレビからジュネーブに人を派遣してくれないか、と依頼しておいたのだが、フジテレビが代表を派遣した様子はなかった。

ニクソン米大統領のカンボジア侵攻作戦が開始されて以来、わずかの期間で、夥しい数のジャーナリストが、失踪者リストの中に記録されていた。カンボジア戦線が、いかに混迷状態にあり、取材記者にとって、いかに危険な戦場であったかを物語っていた。

私の手許にある失踪者(死亡者も含む、いずれも一九七〇年)は次の通りであった。

(アメリカ人)

シーン・フリン(フリー・ライター、四月六日、スバイ・リエンで行方不明)

ダナ・ストーン(CBS、四月六日、スバイ・リエンで行方不明)

ウエルス・ハンゲン(NBC、五月三十一日、タケオで行方不明)

ジェリー・ミラー(CBS、五月三十一日、タケオで死亡)

ジョージ・シバーストン(CBS、五月三十一日、タケオで死亡)

フランク・フローシェ(UPI、十月二十八日、カンダルで死亡)

(フランス人)

ギレス・キャロン(ギャマ・ニューズ、四月五日、スバイ・リエンで行方不明)

クロード・アルビン(ニューズ・ウイーク、四月六日、スバイ・リエンで行方不明)

ガイ・ハノチュクス(レスクプレス、四月六日、スバイ・リエンで行方不明)

ロジャー・コルネ(NBC、五月三十一日、タケオで行方不明)

レイモン・メイヤー（フランス・テレビ、七月七日、シエム・リヤップで死亡）
リーネ・ポイセンニュー（フランス・テレビ、七月七日、シエム・リヤップで死亡）
フランシス・ベイリー（ギャマ、一九七一年二月二十一日、コンポンチャムで死亡）
ガストン・バドレ（フリー、一九七一年七月二十九日、シエム・リヤップで行方不明）
（オランダ人）
ヨハネス・ダイニスフェルド（学生、十二月十九日、コンポンチャムで死亡）
（スイス人）
ウイリー・メトラー（フリー、四月十四日、カンボットで行方不明）
（西独人）
ダイエッテル・ベレンドルフ（NBC、四月八日、スバイ・リエンで行方不明）
（オーストリア人）
ジョージ・ゲンスラックナー（フリー、四月八日、スバイ・リエンで行方不明）
（インド人）
ラムニク・レクハ（CBS、五月三十一日、タケオで死亡）
（日本人）
日下陽（フジテレビ、四月六日、スバイ・リエンで行方不明）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

高木祐二郎（フジテレビ、四月六日、スバイ・リエンで行方不明）
柳沢武司（日本電波ニュース、五月十日、カンボットで行方不明）
中島照男（大森国際問題研究所、五月二十九日、タケオで行方不明）
和久吉彦（ＮＢＣ、五月三十一日、タケオで行方不明）
坂井幸二郎（ＣＢＳ、五月三十一日、タケオで行方不明）
石井誠晴（ＣＢＳ、五月三十一日、タケオで行方不明）
沢田教一（ＵＰＩ、十月二十八日、カンダルで死亡）

ピュリッツァー賞受賞カメラマンの沢田教一や、俳優エロール・フリンの息子シーン・フリンも交えて失踪、死亡ジャーナリストのリストの中に、私の研究所に所属する中島照男の名が連なっていた。

中島照男が、プノンペンから、最後に手紙を投函して、消息を絶ってから、一年と二カ月になっていた。

『拝啓、プノンペンに来て、はや十日たちましたが、殆ど何もなしえぬまま、過ごしてしまいました。これは、勿論、予定の行動ですが、何とか、カンボジアの国内情勢が分かりかけてきました。五月末から、一週間から十日間ばかり、地方に出て行く予定です。そして、六月半ばには、

プノンペンから車で、スバイ・リエン経由でサイゴンに行く予定です。元日本軍で働いていたという、荒っぽい華僑で、日本語、中国語、ベトナム語、カンボジア語が、ペラペラのパイロットを安く雇えるメドがつきましたので、国道一号線を走破することを決心したわけです。

まあ、いい原稿といえぬかもしれませんが、月刊誌用と週刊誌用の、長短二本を書きあげてみました。御一読の上、よろしくお願いします。カンボジアでは、もう戦争らしい戦争は終わったのでないかといわれていますが、一方、プノンペンには、百人以上のベトコンが潜入したという情報もあります。何度か、ロケット砲撃があるという噂も立ちました。これから、雨期を迎えて、情勢は膠着状態に入る感じもしますが、六月一日から、戒厳令がしかれるという情報も確度が高いようです。

プノンペンで、七〇年五月二十七日』

これが、中島照男の、私への最後の手紙となり、絶筆となった。失踪者リストの中の、中島照男の、タケオにおける失踪日は、五月二十九日だから、失踪二日前の夜に、この手紙を書き、翌二十八日投函したことは、ほぼ間違いない。

中島照男の失踪事実の、第一発見者は、シカゴ・トリビューン紙特派員のジム・ジェームソンであった。日本語が達者で、東京の内閣記者会見でも、たった一人、日本語で首相に流暢な質問をぶっつけ、首相や、テレビの日本人視聴者を驚かせるアメリカ人記者である。

「中島がいない！」

まず、ジェームソンが騒ぎだした。日帰りで出かける、と言ってプノンペンを気軽に出た中島照男が、五日間も帰って来ぬので騒いだわけだ。ジェームソン記者は、プノンペンの日本大使館員の立ち会いで、ケマラ・ホテルの中島の部屋をあけて調べたところ、室内は乱雑で、机上にパス・ポートや身回り品全部が残されていた。出かけて行った日の夕方には、帰るつもりで、慌てて部屋を出たらしいという印象から、〝中島失踪〟を断定、新聞発表に踏み切ったというのだ。

私は〝中島失踪〟の第一報を、共同通信と外務省から知らされたが、その直前に届いた中島の手紙の文面から想像して、中島は、きっと「オウムの嘴地帯」と呼ばれたスバイ・リエン地区で、失踪したものに違いない、と考えていた。

時を移さず、二度、三度、私は、北京亡命中のノロドム・シアヌーク殿下に至急報を打電し、中島照男が、私の部下であり、クメール・ルージュに同情的な男であるから、ぜひ釈放してやってくれと依頼した。シアヌーク殿下は、その都度、折り返し電報をくれ、「善処する」と約してくれた。

だが、シアヌーク親電の中で、気になったのは、電文内容が、殿下の私への友情を示して懇切丁寧であったにもかかわらず、次のような、釈明とも言い訳ともつかぬ言葉が、どの親電にもつけ加えられていたことだ。

「すべての外人記者の捜索に協力し、前線にその旨命令しましたが、目下のところ、手がかりがありません」

「ナカジマは柔道か空手の選手だったか？」というCBS東京支社の電話にこだわった私は、不思議に胸が高鳴るのを圧え切れなかった。そこで簡直に聞いてみた。

「中島照男がどうかしましたか？」

「いや、柔道選手でないなら、間違いでしょうが、身許不詳の日本人の死体と、国籍不明の一死体……二つの死体を発掘しましたので……」

「……？」

CBS支社長は、低い丁寧な会話を続けた。

「死体が身につけていた着衣、ベルト、靴などのフォート・スタットが届いています。もしご希望ならば、お貸ししたいと思いまして」

「お借りしたい。すぐメッセンジャーを出します。お願いします」

私の事務所から、清水順子が、タクシーでCBS支社に飛んだ。正午を少し過ぎていた。冷房機の騒音が、急に、また苛立しく感じられた。

私が中島照男の夢を見たのは、もう大分、前になる。東京オブザーバーの編集室に、黒い背広

姿の中島が入って来たのだ。相変わらず、油気のない、乾いた髪をざんばらにしていたが、顔が透き通った蠟のように白かった。すーっと入って来て、編集局の隅っこに立って、ぼんやり虚空を見据えていた。ふと、中島の気配を感じ、

「やあ、お前は中島じゃないか、帰って来たのか。もっと、こっちへ来いよ」と声をかけると、中島は、遠くへ、すーっと吸いだされるように消えた。

「きのう、中島が帰って来た夢を見た」と、私の義兄の、柴田剣太郎に打ち明けると、柴田剣太郎は、グラスの手をとめた。

「寄ってきたか？　消えたか？」

「すーっと消えた」と答えると、柴田剣太郎は、グラスを卓上に置いて、悪い顔をした。

「死んだかもしれぬぞ」

剣太郎は、中島とは常に好ましい感情を抱いて接してきた男だ。中島照男は、カンボジアに旅立つ前、柴田家に足を運び、私の姉を交えて、カンボジアへの旅と彼の将来の夢を語っていた。

2

「中島の後ろ姿は寂しすぎたからな」

柴田は、中島青年には、どうも妙な翳りがある、といつも気にしていた。

「あの男、いいやつだし、俺は好きだが、寂しい翳りがあるな」とよく言っていたのである。

CBS支社から、清水順子が、一束の書類包みを、抱えるようにして持ち帰ったのは、私が、中島の夢のことを思いだし、柴田の主張する翳りをめぐる中島論を嚙みしめながら、まずい昼食を終わったときだった。

「このカラー写真は二組あるそうですのよ。一組のカラー写真が、日本人の身許不詳者で、あとの一組が国籍不明の男のものだそうです」

清水順子は、やや蒼ざめた表情で書類を机の上に仕分けながら、聞かされてきた通りを説明した。秘書室から、伊藤恢子、荒巻喜代も、蒼い顔をして応接室の長テーブルの前に駆け寄ってきた。

結婚式の記念写真のフォート・スタットより、綺麗な表紙のついた十六枚のカラー写真が包みの中から、身許不詳の日本人分八枚、国籍不明者分八枚、合わせて十六枚がでてきた。もちろん、私は、国籍不明者分はあとまわしにして、日本人身許不詳者分六枚の写真を精密詳細に点検したのである。

地下から一年ぶりに掘りだされた死体が、身につけていた遺留品のカラー写真なのだが、靴と

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.